# 写真資料をもとにした景観分析に関する若干の試論

## ――佐賀平野における村落景観を事例に――

藤　永　　豪
FUJINAGA GO

## はじめに

本COEプログラムにおける主要な研究テーマの一つは「環境と景観の資料化および体系化」にある．そのための具体的な研究資料が，澁澤敬三らによって撮影，記録された写真，いわゆる「澁澤写真」である．現在，「澁澤写真」は神奈川大学日本常民文化研究所に保管されている．そこには1930年代，すなわち昭和初期の日本各地における「人」や「もの」，「風景」などが数多く記録されており，地域や民俗を分析する上で貴重な資料となる．とりわけ，地理学の分野では，地域性や地域的差異を考察する上で，写真は重要な資料となる．そして，この「澁澤写真」を用いた昭和初期と現在の景観との比較考察による，景観の時系列的変化の分析が，本COEプログラムの具体的な研究方針の一つとして位置づけられている．そこで，本報告では，「澁澤写真」の考察のための準備段階として，写真資料を用いた景観分析の可能性について，地理学の立場から，若干の試論的考察を行ってみたい．

## I　写真資料を扱う上での課題

### I-1　記録としての写真，資料としての写真

今日，フィールドにおいて写真を撮影しない地理学者や民俗学者は存在しないのではないか．フィールドでの調査を終え，一つの成果をまとめる段階になって写真を眺めた時，あらためてその地域を確かめなおすこともしばしばである[(1)]．あるいは他者にフィールドを提示する場合，写真はみる者に具体的なイメージを伝え，地域を理解させる上で有効な手段となる．実際，地理学や民俗学関連の学術論文の中では写真が多用されるとともに，写真を用いて地域を記述した書籍が多数出版されている[(2)]．この場合，写真には二つの意味合いが存在すると考えられる．

一つはフィールドを一枚の紙片の中にとじ込め，記憶を呼び戻し，景観を他者に説明するという「記録」としての枠組みである．このような写真の利用はフィールドを対象とする以上，必要な手法としてこれまでもみられた．もう一つは明確な対象を写真に撮り，その写真に写し出された景観を解釈するという行為の中に表れた「資料」としての写真である．もちろん，これは撮影者の意図の下に切りとられた景観が前面に押し出されたものであり，その解釈は自己と他者両方に対する説明資料としての意味を持つものとなる．解釈の中に客観的事象と意味を捉え，写真資料の意義を見出している．

その一方で，他者が撮影した写真の扱いと解釈が重要な課題となっている．撮影というただでさえ主観的な行為が他者によってなされた場合，その結果である写真を資料としてどのように扱えばよいのか．そこに危うさはないのか．この点に関して，菊地（2000）は1951年7月に発見された石川県鳳至郡柳田村の野本家におけるアエノコトの写真を例に，写真の解釈と利用のあり方の危険性を示唆している．この写真は発見後，いくつかの出版物に利用されている．しかし，菊地によって，この写真の中で展開されるアエノコトは厳しいメディア統制が行われた第二次世界大戦下に軍人の前で演じられたことや行事を進行する人物が神道式神祭の作法を学んでおり，祝詞や御膳の様子にその影響が如実に表れていることから，「神道」の強い影響を受けた，本来の農耕儀礼としての姿とは異なることが明らかにされている．このような写真の解釈と利用が行われた経緯に関して，菊地は，当時の民俗学の

本流が写真に対して消極的であったことと関係すると述べている.「文字的な認識の枠組み」の中で,「儀礼イメージ」が共有，受容されているところに，タイミングよく写真という「ビジュアル」がすべりこみ，それが言葉を通したアエノコトのイメージを強化したのではないかという仮説を立てた．さらに菊地は写真について,「撮影者・被写体という生身の身体が，技術，資本，制度，学知といった多様な水準と交錯する，きわめて重層的な方法／実践領域である」と述べている.

### I-2　景観分析のための資料としての写真

では，このような写真を景観分析にどのようにとり込めばよいのだろうか．矢野（2003）によれば，写真を記録と表現の手段として，積極的に調査に活用したのは地理学の分野だという．矢野は石井（1988）や田中（1935）を例に，地誌作成のために写真が多用されてきた流れと動向について言及している．特に田中の著書『地学写真』の中での写真の撮影と利用について,「道路網，水系，耕作系等が表現された地域全体」と「家屋のタイプ」や「生業」,「人間の風貌」などに関する写真が複数まとめられており，いわば「村落を被写体とした組写真」的な形式によって地域が表現されていることに注目している．さらにこの写真利用について，田中の言を借りつつ,「地理的景観の意味を正しく把握し，その観察・記録・観察地点の適切な取捨選択を行う」といった「学術的作為」が作用しており，これは「演出」とは異なる一つの表現方法であると述べている．当然，地理学の分野では，地域を知る手がかりとして，景観を読み解こうとするものであるが，田中の写真の利用法は，まさにこの立場を踏まえ，実践しようとしたものといえる.

このような写真の利用法は，逆に写真を読み解くためのアプローチを示唆しているのではないか．確かに写真には，撮影するという主体的行為と写しとられる被写体という受動的な性格が常につきまとう[(3)]．しかしながら，田中や矢野のいう「学術的作為」が写真に働き，その上で撮影され，切りとられた各々の景観から地域を表現しているのであれば，このこと自体が写真の中の景観を読み解く鍵となる．すなわち，地域を正確に写しとろうとする視点が，すでに景観を構成する要素にそれぞれ向けられているのである．この視点を，反対に他者が撮影した写真に当てることで，景観を分析し，地域の特性を解明することにつながらないかと考えるのである．幸いなことに，写真を用いておらずとも，地域における景観とその構成要素に関する研究は地理学，民俗学を問わず，多数蓄積されている．これらの先行研究を参考に，あらかじめみるべき景観構成要素を吟味し，各要素が何を意味するのかを考察することが必要であると思われる.

以上のことを踏まえ，本報告では,「澁澤写真」の中の景観を考えていく上での予察的考察として，筆者自身が撮影した写真をもとに村落景観の試論的分析を行いたい.「澁澤写真」にも村落景観が数多く撮影されている.

## II　研究対象地域

研究対象地域として選定したのは，佐賀県佐賀郡久保田町に立地する二つの集落である（図 1）．久保田町はクリークで有名な佐賀平野の中南部に位置し，東を嘉瀬川，西を福所江川，南を有明海と接している．県庁所在地である佐賀市とは嘉瀬川をはさんで隣接している．有明海沿岸は中世より干拓が盛んな地域であり，久保田町もその三分の二が干拓によって造成された（佐賀新聞社佐賀県大百科事典編集委員会編 1983：226）.

対象集落はこの久保田町南部に位置する．一つは搦（からみ）であり，搦東と搦西に分かれている.「搦」は有明海沿岸でみられる干拓地の地名の一つである．特に江戸期から明治期にかけての干拓集落名に多い．この他，佐賀県内では西部の鹿島市を中心に籠（こもり），福岡・熊本県では開（ひらき）・新開（しんびらき），長崎県では籠・開といった地名がみられる．搦という地名の由来は堤防築造の工法に起因するといわれ，今日でも河川や溝渠の簡単な護岸工事では，くいを打ち，竹や粗朶を絡めつけて土砂の崩壊を防ぐ工事を「岸がらみ」と呼んでいる（青野・尾留川編 1976：66）．佐賀藩は殖産興業の一環として積極的に干拓造成を推し進めた．農民たちは干拓組合を組織し，組合長を舫頭（もやいがしら・ふうつう），組合員を搦子

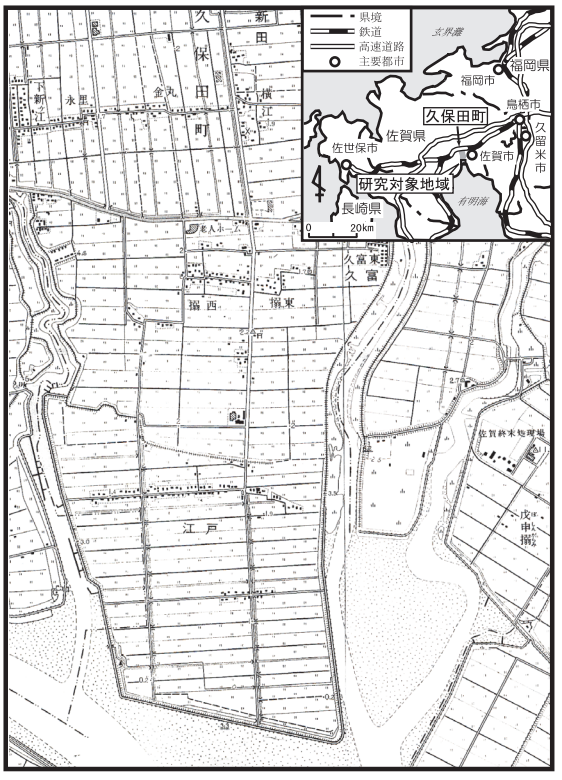


図1　研究対象地域
（国土地理院発行2万5千分の1地形図「牛津」平成4年修正および「佐賀南部」平成10年修正を引用・加筆）

（からみこ）と呼び，明治期以降もこれらの呼称は引き継がれた（「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1982:34）．本報告で研究対象とした搦東と搦西も明治期までに造成された干拓集落である．

もう一つの対象集落は，搦のさらに南に位置する江戸である．江戸の立地する干拓地は，そもそも1934年に干拓造成が始まった．しかし，その後の自然災害などにより，本格的な工事が始まったのは第二次世界大戦後である．戦後は国に代わって県が施工する代行干拓として事業が進められ，1957年には開拓地の指定を受け，翌年から本格的な入植が始まった（「角川日本地名大辞典」編纂委員会 1982:129）．入植者の多くが前述の搦を中心とした近隣の集落の次男や三男であった．工事が完了したのは1960年である．このように，江戸は代行干拓という大きな国営事業によって成立した集落である．当初の集落名はそのまま「干拓」であったが，1981年に干拓のイメージを変えたいとして，現在の「江戸」となった．

以上のように搦と江戸の二つの集落は隣接し，地縁，血縁的な関係を有しているが，成立時期とその背景は全く異なっている．以下，この両集落の景観を比較しながら，考察を進めていく．なお，写真は2004年1月3日および4日に撮影したものである．

## III　写真の中の村落景観を読む

### III-1　写しとられた村落景観とその構成要素

周知のように，地理学や民俗学における村落の景観とこれに関する空間や環境認識をテーマとした研究は数多く，その枚挙にはいとまがないくらいであり，人類学や歴史学，建築学の分野でも扱われてきた[(4)]．これらの先行研究では，集落の景観を構成する主な要素として，いささか乱暴ではあるが，大きく居住域（宅地），生産域（耕作地），林野域（山林），儀礼域（寺社など）等に分けられ，さらにその中で家屋や道路，水路，入会地，私有・国有林，小祠，石像，墓地などの細かな景観構成要素が抽出された．加えて，前述のような一定の面積を占め，しかも可視的な景観構成要素だけでなく，境や聖性，畏怖，禁忌などといった象徴的な目にみえない空間の存在と意味までもが，人々の日常行為や民俗行事，言説等から解明されてきた．もちろん，この他にも多くの景観構成要素があり，また，その分類の仕方も様々である．

ただし，ここでは，「澁澤写真」という他者が撮影した過去の写真の分析を当面の目標としているため，便宜的に写真の中に見出せる景観構成要素に絞って考察を行いたい．そこで，本報告で対象とする景観構成要素は，干拓集落という特性も考慮して，①集落の形態（家屋の形態を含む），②耕作地，③水路，④道路，⑤信仰に関する地物，⑥その他の建造物とする．

ここで，もう一度写真の中の景観について考えてみたい．撮影という行為のもとに写真を語れば，すべてが主観の中に埋没してしまう．一見，写真には客観性など存在しないかのようにさえ思える．しかしながら，写真には撮影者が意図しなかった多くの景観と事物が写しとられている．「澁澤写真」もその例外ではない．地理学の立場から景観を考える場合，当然，地域性を念頭におくのが普通である．この地域性を写真の中の景観をもとに考察する際，まさに偶然，「写しとられた」景観こそが重要な意味を持つのではないか．すなわち，中心となる被写体以外の景観構成要素に注目することで，写真資料を用いた景観分析の可能

性がより広がると考える．そして，「澁澤写真」を管見した限りでは，本報告で扱うような景観構成要素が多数「写しとられ」ている．対象集落の撮影にあたっても，この点を考慮し，組写真の形式をとるよう意識して行った．

### III-2　対象集落における景観構成要素

#### III-2-1　集落の形態

まず，対象集落の形態について，比較してみよう．写真 1 が搦，写真 2 が江戸の集落の遠景である．

搦の集落は塊村，江戸の集落は列村の形態を呈している．これは集落成立における歴史的背景が異なるためと思われる．集落の概要については，すでに述べたが，搦は江戸期から明治期にかけての干拓造成によってできた集落である．佐賀藩の干拓事業は天明以降，1780 年頃より盛んとなったが，その特色は零細農民による小規模な干拓にある．佐賀藩は 1783 年（天明 3 年）に，藩財政強化のために六府方（ろっぷかた）を設置し，その一部局として干拓事業を担当する搦方（からみかた）を置いた（青野・尾留川編 1976：63-65）．しかしながら，佐賀藩の財政事情は悪く，搦方は干拓の指導援助を目的としながらも，大規模な支援を行うことはできなかった．しかも，商人資本の参入を禁止しために，小規模な「搦」が林立することとなった．搦の小塊村としての景観には，このような歴史的背景が隠れている．

一方，江戸は第二次世界大戦後，国と県の政策の下に開発された大規模な干拓地である．開拓地の指定も受け，引揚者も受け入れたが，最も大きな目的は食糧増産にあった．戦後の食糧難の時代である．当然，効率的な農業生産を行うための農村計画が立てられ，写真にも表れているような戦前までとは異なる集落形態をとることになった．

このような集落景観の違いはそれぞれの家屋景観にも表れている．搦の場合，入母屋造りの母屋をはじめ，瓦葺の納屋や広い敷地をとり囲む塀など，いかにも重厚で伝統的な雰囲気をかもし出している（写真 3）．中には佐賀平野でみられるクド造りの家屋も存在

写真 1　搦の集落

写真 3　搦集落の家屋景観

写真 2　江戸の集落

写真 4　江戸集落の家屋景観

する．

江戸の家屋景観は搦に比べ，シンプルである（写真4）．切り妻もしくは寄棟造りの家屋が中心で，トタンやスレート屋根を冠した納屋が母屋の脇に配置されている．平屋も多く，同じような形態の家屋が道路に沿って並んでおり，いかにも開拓集落的な景観を呈している．このような景観は，戦後造成された他の干拓集落でもよくみられる．

### III-2-2　耕作地

耕作地の景観においては，両集落に大きな差異はみられない（写真5，6）．両集落とも米と麦の二毛作が中心であり，類似した作物栽培を行っている．耕地の形状や面積も似通っている．戦後開発された江戸の耕地区画が広いのは当然であるが，搦の耕地は1970年から1975年にかけての圃場整備によって，現在のような広区画となった（佐賀新聞社佐賀県大百科事典編集委員会編1983：226）．いずれにしても，戦後の農業政策の下で同じような耕作地の景観が生み出されたことになる．

### III-2-3　水路

近年まで，佐賀平野はクリーク網が発達し，その脇には柳等の樹木が植えられ，独特の景観をなしていた．しかし，圃場整備によって，暗渠排水が埋設され，クリークと樹木は姿を消した．搦でも同様に用水路は改変され，数本の基幹水路とその支線が直線状に走っている（写真7）．両岸はコンクリートで固められ，かつての景観を偲ばせるものはほとんど残されていない．ちなみに，写真7の水路を埋め尽くしているのは菱である．クリークの菱の実は食糧となった．かつて，佐賀平野の農村では，農閑期に「ハンギー」と呼ばれる大きなたらいのようなものに女性たちが乗り，菱の実を採る光景が各地でみられた．

また，クリークは集落内にも引かれ，農家の敷地の裏には水辺に出るための階段が設置されていた（写真8）．住民はここで洗濯などを行った．搦ではその名残りが今でもみられ，当時の住民と水との緊密な関係が

写真5　搦の耕作地

写真7　搦の農業用水路

写真6　江戸の耕作地

写真8　搦集落内を流れる水路

読みとれる．

一方，江戸の水路は，搦に比べて規模が大きい（写真 9）．コンクリート製であることはもちろん，幅も広く，大型の水門が設置されている．搦の水路のように民家と隣接することはなく，完全に農業用水路としてのみの機能を有している．この水門は，まさに近代農業土木技術を象徴する景観といえよう．

写真 9　江戸の農業用水路と水門

### III-2-4　道　路

集落外の道路，すなわち，農道については，搦集落の圃場整備もあって，両集落とも直線的であり，景観上の大きな差異はみられない．しかし，集落内の道路は塊村と列村という形態の違いから，多少異なる景観を示す．搦は細く狭い道路が不規則に交差しながら，集落内の各世帯を結んでいる（写真 10）．一方，江戸の道路は写真 4 をみてもわかるように，集落内を一本のメインストリートが貫通し，そこに複数の農道が直交している．

写真 10　搦集落内の道路

つまり，搦の場合，集落内における網目状の道路の周りに，耕作地を巡る格子状の直線道路が広がっているのに対して，江戸の場合は，すべての道路が単純な直線であり，これらが垂直に交わる規則的な形態となっている．

### III-2-5　信仰に関する地物

搦と江戸の両集落とも近隣の集落に立地する神社や寺院の氏子と檀家である．したがって，集落内に神社と寺院は立地していない．ただし，搦にはいくつかの小祠や石像が祭られている（写真 11）．江戸には信仰の対象となるような地物はみられない．これは集落の成立時期とその契機の違いに起因しているのであろう．搦と江戸の景観には第二次世界大戦以前と以後という時代の影響が色濃く出ている．

写真 11　搦集落内の小祠

### III-2-6　その他の建造物

最後に，両集落における特徴的な景観構成要素についてみていく．一つは干拓のための堤防である．写真 12 は搦と江戸を分かつ干拓堤防であり，明治期までの干拓地と第二次世界大戦後の干拓地の境界である．表面は雑草に覆われているが，堤防は石垣で出来ている．ただし，現在ではその後の台風による災害を機に，現在ではコンクリートによって補強されている（写真 13）．

これに対し，写真 14 は江戸の最南端の干拓堤防であり，その先は有明海が広がる．戦前の堤防とは，明らかに規模やその技術力において差がみられる．国家主導の下実施された大規模干拓事業の様相を如実に表

現する景観である．

続いて，農業関連の施設を比較してみよう．写真15は搦の南部に建設されたカントリーエレベーターである．圃場整備と同時に設置された．搦はもちろん，江戸も含めた近隣農村における米や麦などの穀物類を一手に扱っている．一方，写真16は江戸に設置されている排水機場である．両施設とも第二次世界大戦後の建造物であり，これらも近代農業を象徴する景観といえる．特に搦のカントリーエレベーターが圃場の中に屹立する様は目を引く．

写真12　搦と江戸の境界となる干拓堤防

写真13　コンクリートで補強された干拓堤防

写真14　江戸最南端の干拓堤防

写真15　搦のカントリーエレベーター

写真16　江戸に設置された排水機場

### III-3　景観の比較からみえてくるもの

ここまで，搦と江戸の各集落の景観を構成する要素を抽出し，その特徴を述べてきた．この景観構成要素を比較することで，どのようなことがみえてくるだろうか．

一つは集落の成立時期の違いが景観に反映されていることである．搦は明治期までに成立した集落であり，小塊村の景観を示す．瓦葺の入母屋造りの家屋が多く，集落内を流れる水路はかつての住民と水との密接な関係を示すなど，伝統的な農村景観を呈している．一方，江戸は第二次世界大戦後に成立し，道路は直線的で，整然とした列村の景観をみせる．

また，両集落とも干拓によって造成された歴史的経緯を持つ．したがって，その景観には，干拓造成を行った開発主体の影響が表れている．佐賀平野の干拓は佐賀藩の援助・指導の下に行われたが，藩財政の都合から組合による小規模な事業が多かった．明治期に入

っても干拓造成の規模は小さなままで，搦集落の景観はその小規模干拓の様相を示している．一方，江戸は第二次世界大戦後に本格的な造成が進んだ．政府の開発計画にもとづき，生産性，効率性に重きを置いた大規模な開発がなされた．そのため，日本各地の開拓地と類似したシンプルな集落と家屋景観が作り出され，耕作地は区画が大きく，格子状の規則的な直線道路が敷設された．その上，小祠や石像など信仰に関する地物はみられない．

ただし，搦集落においても，戦後，圃場整備がなされ，耕地区画は拡大し，道路も直線的なものへと改変された．もちろん，この開発は農林水産省を中心とする戦後の新政府によって実施されたものである．

すなわち，搦集落の景観は明治期までの佐賀藩の流れを汲んだ干拓政策と戦後における新政府の農業政策の両者によって作られたものであり，一方，江戸集落の景観は，いうまでもなく新政府によって作られたものと判断できる．

この他，両集落の景観から，戦後の日本農政における特徴がみえてくる．特に耕作地の景観に，そのことはよく表れている．広区画の耕作地，直線的な道路，これらはすべて大型機械導入などの作業効率・生産性向上のための結果であり，両集落とも似たような耕作地の景観を示すようになった．すなわち，政府主導の強力な農業政策は成立の時期やその歴史的背景の異なる農村を，意図的ではないにしても，似たような均質的な空間，景観へと変えてしまったのである．その強力な国家権力の象徴的景観ともいうべきものが，搦集落のカントリーエレベーターであり，江戸集落の近代的な大型水門や排水機場である．

もちろん，このような農業政策を実行していくためには，それを支える技術力が必要である．石垣の堤防とコンクリートによって造成されたスーパー堤防の景観を比較すれば，戦後の農業政策を支えた土木技術の発展がよく理解できる．

## おわりに
### ――「澁澤写真」の景観分析にむけて――

以上，佐賀県有明海沿岸の二つの干拓集落における景観を比較考察した．「澁澤写真」の景観分析を念頭におき，事前に村落景観を構成する要素を絞り込み，それぞれの景観構成要素について，写真を撮影した．その後，写し出された要素を比較し，二つの干拓集落の景観的特徴とその背後に何を読みとれるのかを考察した．その結果，景観から集落の成立に関する歴史的背景や政策にみられる国家や権力，経済状況，技術力などが浮かび上がってきた．

このように，あらかじめ写真の中に写しとられるであろう景観構成要素をピックアップし，それぞれが何を意味するのかを考察することで，「澁澤写真」の景観全体とその構成要素を把握することがより可能になると考える．もちろん，本報告は便宜的に少数の景観構成要素を用いたに過ぎないが，「澁澤写真」には多様な景観構成要素が写しとられている．その景観構成要素が地域を把握する上で，重大な意味を持つのは自明である．例えば，写真の中に「電柱」や「電線」が写し出されていれば，その地域における一種のイノベーション革命を意味しているかもしれないし，電力会社の文字資料をとり上げるより，雄弁にそのことを物語ることになる．「澁澤写真」は過去における地域の特性を把握するための貴重な資料ともいえる．今後は，「澁澤写真」の中に写しとられた景観をそれぞれの構成要素に分解し，整理していくことが課題となろう．[(5)]

また，本報告は現在の写真を資料として，佐賀平野における村落景観の考察を行ったが，景観の背後にある歴史的経緯については，ある程度の文字資料を補助的に用いながら解説した．当然，景観の形成過程あるいは時系列的変化を説明する上で，現在の写真資料と文字資料では，見落としてしまう要素もでてくる．実際，この報告の中で，どうしても言及できなった佐賀平野における一つの大きな地域的特徴がある．それは，農業生産力の向上と農民の生活である．第二次世界大戦以前の佐賀平野における農業の発展は，「佐賀段階」という言葉に集約される．「佐賀段階」の特徴は肥料などの流動資本のみならず，電気灌漑設備や石油発動機，バーチカルポンプ，動力脱穀機などの固定資本の導入にある（佐賀県史編さん委員会 1974：611-621）．これらの固定資本によって，佐賀平野の農業生産性は著しく向上した．それ以前は，足踏み車を使用

して，人力でクリークから直接，揚水していた．また，冬季にはクリークの水を一時的に抜き，底の泥を肥料として水田に引き上げる「掘干し」などの共同作業が行われていた．その際，フナなどの小魚を捕り，天日で干し，貴重な蛋白源として保存していた．もし，これらに関する写真資料が存在すれば，生産向上にひたむきに努力し続ける農民の姿や知恵，慣習，生活を「ビジュアル」に捉え，景観から佐賀平野の地域的特徴とその変化をより深く考察できたであろう．今日の佐賀平野の景観からその痕跡を探ることは困難である．すなわち，過去と現在の二つの写真資料が互いに補い合うことで，はじめて景観とその背後にある地域性あるいは地域的差異を適切に探ることができる．同じ場所あるいは地域の景観について，過去から現在へ，現在から過去へとリバース可能な写真資料は，文字資料以上の学術的可能性と重要性を秘めている．ここに「澁澤写真」の景観資料としての意義と価値が存在する．

この他，「澁澤写真」の中には，景観ではなく民具などの「モノ」のみが撮影されている写真も多数存在しており，この「モノ」自体が地域を具表している場合もある．このような写真の取り扱いについても，今後検討すべきであろう．

最後に，もう一点，「澁澤写真」の分析を進めていく上での基礎的な準備として，各々の写真の撮影日時，撮影箇所，被写体，使用した機材といった，撮影状況についても考察する必要があろう．澁澤敬三らがどのような行程と撮影環境の中で写真を納めていったのかを正確に把握することで，より適切な「澁澤写真」の活用が図られるものと考える．

## 付記

本稿を作成するにあたって，神奈川大学外国語学部八久保厚志助教授，駒澤大学文学部須山聡助教授をはじめ，神奈川大学21世紀COEプログラムの諸先生方にご指導いただき，神奈川大学外国語学部平井誠講師からは貴重なご助言を賜りました．また，現地における景観撮影では，久保田町搦および江戸の両集落の皆さん，そして，高校以来の友人，横田正和氏のご協力を得ました．以上，記して感謝申し上げます．

## 注

(1) 香月（1989a）は写真を現地調査における「イメージのメモ」と表現し，同じ土地を被写体としても，「自分のフィルム以外の写真はそう使いやすいものではない」と述べている．

(2) 石井（1974，1989，1999），や香月（1989b，2000）などがその好例として挙げられる．

(3) これに関して，成瀬（1997）は「撮影者の意図がレンズというフィルターを通して写真の中に表現される隠された背景が課題」となると指摘している．

(4) 例えば，地理学や民俗学では市川（1997），今里（1995，1999），香月（1989b，2000），関戸（1987，1989，1994，2000），中島（1986），中村（1995，1999），八田（1999），福田（1980），福田（1989），藤永（2000），古田（1987），松崎（1983，1984），松本（1989），八木（1998）らの研究を，他分野では末原（1978）や重村・山崎（1991），山崎・重村（1993a，1993b）などを参照されたい．

(5) 写真の中の景観をどのように解体し，分類していくのか，それ自体がすでに大きな研究課題である．これに関しては，建築学や景観工学の分野において，すでに研究が蓄積されているが，最近の地理学分野の研究では，山口（1995）や高井（2003）が注目される．特に，高井は鉄道の車窓からみえる景観を写真に撮影し，いくつかのグリッドに分割することで，各グリッド内において卓越する要素を集計，分析するなど興味深い検証を行っている．

## 参考文献

青野壽郎 尾留川正平編　1976『日本地誌 第20巻 佐賀県・長崎県・熊本県』二宮書店．

藤永豪　2000「都市近郊山村における地名からみた住民の空間認識――佐賀県脊振村鳥羽院下地区を事例として――」『地理学評論』73A：578-601．

福田アジオ　1980「村落領域論」『武蔵大学人文学会雑誌』12（2）：217-247．

福田珠己　1989「四国山地旧焼畑村落における環境区分――高知県吾川村上名野川の小字名を事例として――」『人文地理』41：364-374．

古田充宏　1987「西中国山地における山村の土地利用と環境認識――広島県山県郡戸河内町那須を事例にして――」『地理科学』42：96-112．

八田二三一　1999「長野県遠山郷山地斜面住民の民俗分類からみた環境認知」『地理学評論』72A：789-807．

市川秀之　1997「山間盆地集落の空間構成――貝塚市藁原の空間論的分析」『日本民俗学』212：1-31．

今里悟之　1995「村落の宗教景観要素と社会構造――滋賀県朽木村麻生を事例として――」『人文地理』47：458-480．

1999「村落空間の分類体系とその統合的検討――長野県下諏訪町萩倉を事例として――」『人文地理』51：433-456．

石井實　1974『地域を写す 石井實地理写真集』古今書院. 1988『地理写真』古今書院. 1989『地と図――地理の風景』朝倉書店. 1999『地理の風景――古代から現代まで』大明堂.

「角川日本地名大辞典」編纂委員会　1982『角川日本地名大辞典 第41巻 佐賀県』角川書店.

香月洋一郎　1989a「フィールドで何を写すか――伝承論ノート3」『民俗と歴史』4：157-184, 平凡社. 1989b『空からのフォークロア フライト・ノート抄』筑摩書房. 2000『景観の中の暮らし 生産領域の民俗』未來社.

菊地暁　2000「柳田國男と民俗写真――あるアエノコト写真のアルケオロジー――」『日本民俗学』224：1-33.

松崎憲三　1983「村落の空間論的把握に関する事例的研究――千葉県海上町倉橋を試例として――」『国立歴史民俗博物館研究報告』2：1-39. 1984「景観の民俗学――山麓農村の景観――. 国立歴史民俗博物館研究報告』4：71-141.

松本博之　1989「環境と認識――生態学的アプローチと人間主義的アプローチ――」『文化地理学』大島襄二・浮田典良・佐々木高明編：117-145, 古今書院.

中島弘二　1986「脊振山麓東脊振村における伝統的環境利用――主体的環境区分をとおして――」『人文地理』38：41-55.

中村康子　1995「秩父山地における斜面中腹集落住民による自然条件の認識と土地利用」『地理学評論』68A：229-248. 1999「山地の農業的土地利用研究の展開――外帯山地山村との関わりを中心に――」『東京学芸大学紀要 第3部門』50：61-70.

成瀬厚　1997「レンズを通した世界秩序――世界の人々をテーマにした写真集の分析から――」『人文地理』1：1-19.

佐賀県史編さん委員会　1974『佐賀県史 下巻』名著出版.

佐賀新聞社佐賀県大百科事典編集委員会編　1983『佐賀県大百科事典』佐賀新聞社.

関戸明子　1987「尾張西部における村落構成と空間認識」『人文地理』39：461-472. 1989「山村社会の空間構成と地名からみた土地分類――奈良県西吉野村宗川流域を事例に――」『人文地理』41：122-143. 1994「焼畑山村における林野の社会空間構成と主体的土地分類――愛媛県面河村大成を事例に――」『人文地理』46：144-165. 2000『村落社会の空間構成と地域変容』大明堂.

重村力・山崎寿一　1991「中久保集落における共同性の展開過程――共同性の空間構造」『日本建築学会計画系論文報告集』424：101-108.

末原達郎　1978「日本のムラにおける環境認識の変遷」『環境と文化――人類学的考察――』石毛直道編：457-465, 日本放送出版協会.

高井寿文　2003「車窓シークエンス景観と乗客が沿線地域に抱く印象との関わり」『地理科学』58：112-132.

田中薫　1935『地学写真』古今書院.

八木康幸　1998『民俗村落の空間構造』岩田書院.

山口泰代　1995「聖地的山里室生の景観構造――人を魅了する風景へのアプローチ――」『人文地理』49：159-174.

山崎寿一・重村力　1993a「中久保集落における集落域の土地利用と土地割形式――共同性の空間構造」『日本建築学会計画系論文報告集』443：133-141. 1993b「生活地名からみた中久保集落の空間意識の構成」『日本建築学会計画系論文報告集』451：167-176.

矢野敬一　2003「戦前における映像メディアと「郷土」の表象――熊谷元一『会地村――農村の写真記録』と民俗学――」『日本民俗学』235：34-64.

（COE 研究員 PD）

〔2004年2月20日受理, 3月10日審査終了〕